



## 1 がんの脳への転移について

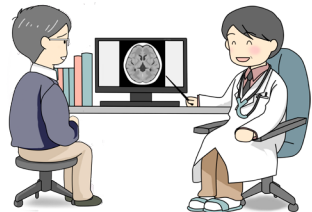
内臓など脳以外の場所にできたがん細胞が、血液の流れによって脳に到達し、そこで増殖することを「脳転移(のうてんい)」と言います。また、脳転移で発生したがんを「転移性脳腫瘍(てんいせいのおうしゅよう)」と言います。近年、転移性脳腫瘍の患者さんは増加傾向にあり、全がん患者さんの 20～40%程度は脳転移が生じると言われています。この背景には、がん治療の進歩により、がんと共存しながら生活をする期間が延びていることなどが挙げられます。

転移が起こるとがんのステージ分類では、「ステージⅣ」で進行がんと診断されます。そのため、患者さんやご家族の中には、「すでに末期状態だ」、「もう長くはない」と考えられる方も少なくないでしょう。また、脳は生命維持の他、運動、感覚、知的活動など、人の体をコントロールしている大切な臓器ですので、脳にがんが発生すると、「どんな状態になってしまうのか」という大きな不安も感じられると思います。

確かに「脳転移」は、患者さんの生命に影響を及ぼすことや生活の質(Quality of life:QOL)を低下させる大きな要因になります。しかし、がん治療の進歩は「脳転移の治療」の進歩ももたらしていますので、あきらめるのではなく、よく医療者と話し合ってみましょう。

詳細は後で述べますが、脳転移の治療法には、手術、放射線治療、薬物療法などがあります。また治療中あるいは治療後にリハビリテーションが行われる場合があり、これらを組み合わせれば、治癒が難しくても、生活の質の維持が可能になる場合があります(18 ページ～24 ページ参照)。

脳転移による生活の質の低下を防いだり、負担が少ない治療を受けたりするためには、**早期に発見、早期に治療**をすることが最も重要です。定期的な受診に加え、頭痛や吐いてしまう状態が続くなど、何か症状があった場合には、我慢しないで早めに診察を受けるようにしましょう。



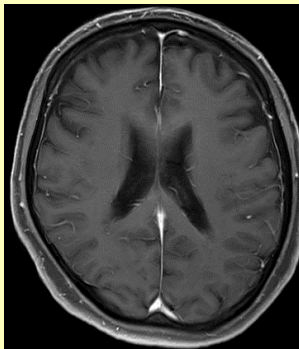
### 【脳転移を起こしやすいがんの種類と好発年齢】

脳転移を起こしやすいがんの種類は、「肺がん」(最も多い)、「乳がん」、「大腸がん(結腸がん・直腸がん)」、「胃がん」、「腎がん」、「頭頸部がん」などです。そして高齢者に起こりやすいという特徴があります。肺がんなどでは、定期的に脳の画像検査(MRIやCT検査)も行われるでしょう。

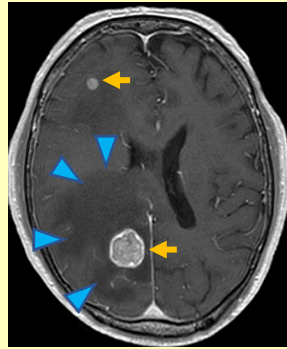
### 【脳転移が起こりやすい脳の部位と転移の数】

脳転移は脳のどこにでも起こりますが、起こりやすい部位は、大脳では、前頭葉が多く、次いで頭頂葉、後頭葉、側頭葉と続きます。また、小脳への転移も比較的多くみられます。その他の部位では、頻度は高くありません。

転移は 1 ヲ所だけでなく、多発性に発生することもあります。転移したがんの大きさや個数は、治療の選択に影響を与えます。



《 正常 MRI 》



《 脳に転移したがん(↑印) 》

がん周囲の特に黒い部分(▲印)が脳のむくみ(脳浮腫)です

けつえきのうかんもん  
患者さんが増えている背景：血液脳関門(blood brain barrier; BBB)

脳転移を発症する患者さんの数が増加傾向にある背景は、患者さんの生存期間が伸びていることに加え、脳に存在している「血液脳関門(けつえきのうかんもん)」というしくみが要因になっています。

私たちの体は血液から酸素や栄養の供給を受けていますので、体の毛細血管のほとんどは、多くの物質が通過できるようになっています。しかし、脳は大事な臓器ですので、脳の毛細血管には、物質の通過を制限するしくみがあります。これは脳を守るしくみですが、一方で、これにより多くの抗がん剤が脳転移部に到達できない(抗がん剤が効きにくい)状況があります。このため、抗がん剤で元となったがんの状態をコントロールできても、脳転移はコントロールできない(治療が難しい)という現状がありますので、患者さんは増加傾向にあります。

